

宝地房証真と起信論

——真如隨緣説を中心に——

武 覚 超

叡山中古の学匠たる宝地房証真（一一二四頃）と『大乘起信論』との關係は、証真の畢生の力作である『法華玄義』

『法華文句』『摩訶止観』の三大部の私記において、起信論の解釈分の中の心生滅門や分別菩提道相を中心に、起信論の組織のほぼ全般からの引用が八十一回もみられるし、「起信の三疏」といわれる淨影慧遠の『大乘起信論義疏』、海東元暁の『大乘起信論疏』、賢首大師法蔵の『大乘起信論義記』にも注目しているので、伝教大師最澄をはじめとする叡山仏教における起信論の真如縁起法門依用の立場を受けて、起信論を深く研究していたことが窺われる。

特に、伝教大師最澄が対法相宗との論諍にしばしば使用した真如隨緣説については、証真もこれを起信法門の特色を端的に表現した用語として重視し、天台法門との融会を図って

いる。そこで証真は、起信論の真如縁起法門を天台教学の中にどのように位置づけ、またいかに評価していたかについて、証真の真如隨緣説に関する論説を取り上げて検討を加えてみようと思う。

二

証真の真如隨緣説によって彼の起信論観を明らかにするためには、証真以前の叡山仏教において、起信論の真如隨緣説がどのように取り扱われてきたのか、まずその思想的展開をみておかなければならないであろう。

日本天台の開祖伝教大師最澄（七六七—八二三）は、一三権実の論諍において、起信論の真如隨緣説を基調として、法相宗徳一を批判したことが『守護国界章』にみられる。

夫、真如妙理有三兩種義。不變真如凝然常住。隨緣真如縁起常住。
…… 飢食所執凝然真如。定為偏真。以三獸同涉。故不具三

隨縁（二）故。縁起（レ）不レ即レ故。（大正蔵七四、一二二c）

最澄みずからは、真如の妙理に不変と隨縁の二義をたて、不変真如は凝然常住であり、隨縁真如は縁起常住であるとのべている。そして「不変隨縁一味真如」（大正蔵七四、一八四b）たることを立場としながら、徳一の凝然真如に対しては、不変の義のみをたてて隨縁義を説かないから、三乗共学の偏真にすぎないと批判している。つまり無為真如と有為諸法との一体関係を認めない法相宗の三乗教学を起信論の真如隨縁義によつて論破しようとしたものであろう。かかる最澄の不変隨縁義は、判溪湛然（七一―七八c）が『金剛錍』において、「万法是真如。由三不変（二）故。真如是万法。由三隨縁（二）故」（大正蔵四六、七八二c）などとのべて、万法と真如との関係を起信論の不変と隨縁の二義によつて立証しようとした真如縁起導入の立場を受けたものであるが、その論拠は、華嚴の賢首大師法蔵（六四三―七一c）の『起信論義記』にあると思われる。

法蔵の『起信論義記』（大正蔵四四、二五五c）には、真如に不変と隨縁の二義をたて、不変義は真如門に、隨縁義は生滅門に配されている。そして両者の関係をみると、体相用の三大のうち相と用とは、真如の隨縁義を説く生滅門でのみ語られるが、体は、生滅門だけでなく不変義たる真如門にも共通するものとして示される。法蔵はこれを「全体不変、挙体

隨縁」（大正蔵四四、二九一c）ともいつているが、最澄はこの点を「不変隨縁一味真如」と表現したのであろう。

また法蔵の『華嚴五教章』（大正蔵四五、五〇〇a）には、「凝然」の義は、隨縁して染淨を成ずる時も自体を失わない点をいうのであつて、法相教学でいう「真如凝然不作諸法」とは異なるとのべているので、最澄が不変真如を凝然常住とみたのも、法蔵の起信疏に示された真如觀に基づくものであつて、隨縁をたてない徳一の凝然真如については偏真と貶し、みずからの不変真如と区別したものと考えられる。

次に慈覚大師円仁（七九四―八六四）には、真如隨縁説を密教的立場にまで及ぼした論述が『金剛頂経疏』（大正蔵六一、一一c）にみられるし、また智証大師円珍（八一四―八九一）は、『法華論記』（智証全集上、二八一b）において、隨縁不変説が妙法家の円融義を示すものであるとして高く評価している。しかし隨縁と不変の二義について、これを天台四教判の中に明確に位置づけたのは、五大院安然（八四一―九〇二）であらう。

安然の『真言宗教時義』（大正蔵七五、三七五b）には、大乘に権大乘と実大乘とを立て、真如凝然不作諸法の立場から五性各別を説く『唯識論』などは権大乘であつて、真如能変を立場とする『起信論』などは一性皆成を主張しているから実大乘だと判じている。さらにこれを委しく釈して、蔵・

通・別・円の四教に縁起法門を分判して、起信論は真如に不変と隨縁の二義を立て、しかも真如の当体がそのまま諸法だと説くが故に、円教位の法門だと考えていたごとくである。

三

叙上のごとく、日本天台における起信論の真如隨縁説については、最澄がみずからの真如觀の基調として依用して以來、円珍や安然は、これを円教位の法門だとして高く評價しているごとくである。しからば宝地房証真是、かかる学説に對してどのように考えていたのであろうか。これについては、縁起法門を藏・通・別・円の四教に分判し、起信論の真如隨縁説を円教に位置づけた安然の『真言宗教時義』の所説を全文に亘って、『法華玄義私記』に援用しているが、証真自身は、真妄相望の説を依持門と縁起門との二門に分けて、私云、依持是別意、縁起是円義、今家円義、真如隨縁變、成二諸法。故必還源。若唯識等、真如不變。八識能變。故不可云皆歸真如。此即終成、真如不變之論也。(日仏全、三四八上)とのべている。ここで起信論の真如隨縁説を円教の義とみて、唯識等の真如不變、八識能變と對比したのは、基本的に安然の所説を継承したものと見えるであろう。

しからば証真是、真如隨縁説を天台円教とみることによって、天台教学と起信論との融会をどのように図ったのである

うか。この点に關しては、証真以前の叡山仏教にみられないより具体的な説示がみられるので取り上げてみよう。まず『玄義私記』には、

一約二体用。中道為レ体。空仮為レ用。謂方法本是不變真如。名為中道。亦是真諦。亦是仏界。而真如隨縁。作二諸法。故名為レ用也。亦名空仮。亦是俗諦。亦是九界也。若論常同俱体俱用。若揆常別体用宛然。如二鏡、明像一。而論三。三。而論一。而鏡是体。明像是用也。(日仏全、五七下)

とあり、天台円教の中核をなす円融三諦と真如隨縁説との結合がみられる。

不變真如—中道(体)—真諦、仏界
隨縁真如—空仮(用)—俗諦、九界

つまり、不變真如を中道、隨縁真如を空仮の三諦にあて、鏡像の譬によって円融の論理を展開している。さらにまた、『止観私記』には、

七事理俱融。故說唯識。謂如来藏拳レ体隨縁。成二弁諸事。而其自性本不生滅。即此理事混融無礙。是故一心二諦皆無障礙。起信云。依二心法有二門。一心真如門。二心生滅門。然此二門皆各總攝一切法……第七正是円教一心三諦意耳。(日仏全、八五六上—下)

と述べられ、事理俱融(無礙)の立場に立つものとして起信論の如来藏隨縁説をあげ、起信論の心真如門と心生滅門の一

心二門によって理事無礙の説を例証した『探玄記』の所説（大正三七、三四七a、b）を引用して、これを天台円教に位置づけている。先の『玄義私記』にみられる三諦と不変隨縁との対配と考え合わせても、起信論の一心二門説が、円教の一心三諦の意を示すものと主張しているのは当然のことである。

次に天台の三身説と不変と隨縁の兩種真如との関係についても『玄義私記』に、

別教^ノ^ハ^ノ^ハ^ニ法身^ニ。故^ニ應^レ不^レ遍^{ナリ}。円教^ノ^ハ^ノ^ハ^ニ法身^ニ。故^ニ應^レ遍^{ナリ}。也。若^ク分^ク三^ニ身^ニ、各^レ論^レ編^者。不^レ變^レ真^レ如^ノ名^ニ法^身。隨^レ縁^レ真^レ如^ノ名^ニ報^應。編^者。（日仏全、二七六上）

と説かれていて、起信論の不変真如と隨縁真如を根拠として円教の応身の体が法身であることを証明している。すなわち不変真如によって法身編であり、隨縁真如によって報身と応身とが共に編であるというのである。これはまた同じく『法華疏私記』に、

不^レ變^レ真^レ如^ノ名^ニ凝^然。常^ト。是^レ法^身也。隨^レ縁^レ真^レ如^ノ名^ニ緣^起常^ト。報^應。隨^レ縁^レ故^ニ非^レ凝^然。編^者。（日仏全、七一六下）

とも説かれていて。これらは最澄が『守護国界章』において、実教三身を立てる天台の立場を隨縁真如説によって論証したのを承けたものであるが、証真は三身のそれぞれを具体的に不変と隨縁とに配当し、しかもこれが円教の立場である

ことを指摘した点に、最澄説の明確化がなされているといえる。

しからば、中国の趙宋天台における四明知礼（九六〇—一〇二八）の別理隨縁説については、どのように評価していたのであろうか。山家派の知礼が真如隨縁説を円教とみる山外派に対して『十不二門指要鈔』を著して、別理隨縁説を唱え、起信論の隨縁説を別教に位置づけたことはよく知られている。証真は、むしろこの山家山外論諍を知っていたごとくであり、『玄義私記』にこれを取り上げている。しかしながら証真は、

問。別教^ニ明^ニ隨^レ縁^レ真^レ如^ノ。耶。答。近代^ノ唐^ノ書^ノ廣^ニ明^ニ別^ニ教^ノ真^レ如^ノ隨^レ縁^レ不^レ隨^レ縁^レ論^ノ。知^レ禮^ノ云。別^ニ教^ノ真^レ如^ノ隨^レ縁^レ生^ニ妄^ニ法^ニ。……私^ノ云。……別^ニ教^ノ既^ニ明^ニ理^ノ事^ノ隔^レ異^ニ。豈^ニ彼^ノ真^レ理^ノ變^レ成^レ事^ノ耶。是^レ故^ニ諸^ノ文^ノ雖^レ云^ニ生^レ法^ニ。不^レレ^云隨^レ縁^レ。編^者。（日仏全、三一九下～三二〇上）

と述べて、別教では生法というべきであって、隨縁義を立てるべきでないと主張している。知礼のごとき別理隨縁説は認めなかったと考えられる。証真はあくまでも最澄以来の叙山初期における真如隨縁説重視の立場を継承しつつ、起信法門にみられる真如の不変と隨縁の二義を天台円教の法門として活用し、天台教学の中核をなす三諦説や三身説などとの結合を図ったところに特色があるとみてよいであらう。

（叙山学院助教）